

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520395

研究課題名 (和文) 山形市方言における動詞述語文の記述的研究

研究課題名 (英文) Descriptive Study of Verb Predicate Sentences in Yamagata Dialect

研究代表者

渋谷 勝己 (SHIBUYA KATSUMI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90206152

研究成果の概要 (和文)：

山形市方言の動詞述語文のもつ文法カテゴリー、とりわけ、記述のほとんど行われていない伝達的なモダリティを担う文末詞を中心に、詳細な記述を行った。具体的には、

- (1) 文末詞ジェを分析し、それが「聞き手のもっているものとは異なる正しい知識・情報であるとして、聞き手に提示する」という機能を担うこと。
- (2) 引用・伝聞を表すマーカであるテとドを分析し、前者が単純な引用、後者が話し手がその発話行為にコミットしての引用を表すこと。
- (3) これまで記述した 10 ほどの文末詞の相互承接のあり方は、命題に関わるものが動詞の近くに、聞き手目当ての機能をもつものが文末に位置すること。

などを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

Detailed description of grammatical categories of verb predicate sentences in Yamagata Dialect was conducted. Special attention was paid in this research to the description of sentence final particles (SFPs) which express hearer-oriented modality. The following results are obtained:

- (1) The SFP *-je* denotes that the speaker passes the information to the hearer believing that the speaker's information is different from the one of the hearer and the former information is the accurate one.
- (2) The evidential (hearsay) form *-te* marks that the cited information is just the information the original speaker passed on to the current speaker and the truth value of it is left untouched. *-do* on the other hand shows that the current speaker as well as the original speaker commits to the truth value of the information.
- (3) The 10 SFPs described so far is arranged syntactically according to its function. More proposition-oriented SFPs are located nearer to the verbs and those directed solely toward hearers find their position at the end of sentences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言文法、文末詞、山形市方言、記述

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ひとつの言語システムを取り上げてそれを網羅的に記述するという、言語研究のなかでも最も基本的な研究である。

現在、世界の言語学界は、ユネスコ等の機関を中心にして、消滅の危機に瀕している言語や方言のデータ収集と記述を行う作業を積極的に推進しているが、本研究もその一環として行うものである。

本研究を行う個別的な背景としては、次のようなことがあった。

(1) 一方言の網羅的な記述の欠如

方言研究界においては、構造主義的な手法による音素体系の記述やアクセントの記述、あるいは沖縄方言の記述を除けば、全般的に言語地理学的な研究や社会言語学的な研究が多く、個々の方言の文法体系の記述が著しく遅れていた。共通語文法研究界においても、方言を取り上げて分析、記述しようとする機運はまったくといってよいほど生じていなかった。

(2) 多様な談話データの欠如

当該方言については、国立国語研究所(1978)『方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―』(秀英出版)、同(2006)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成3 宮城・山形・福島』(国書刊行会)などに談話データが収録されているが、山形市方言のものではなく、しかも内容の多様性や量に欠けていた。

2. 研究の目的

渋谷の母方言である山形市方言の動詞述語文の包括的な記述を行うこと、またそのことを通して方言文法記述のひとつのモデルを提示することを目標とした。具体的には次のとおり。

(1) 理想的な文法書のありかたの検討

これまで刊行されてきた内外の記述文法書を批判的に検討し、理想的な記述文法書のありかたを検討する。

(2) 各文法カテゴリの網羅的な記述

格・ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティなど、動詞文のもつ文法カテゴリを網羅的に記述し、良質の文法書を提供する。とくに、渋谷の内省によっては記述しきれない文末詞や、共通語のシステムと運用面で異なるとされる受身文・命令文などについて、現地調査を行うことによって談話資料を収集しつつ、分析を加える。

(3) テキスト資料の作成

日常的な会話や昔話などのテキスト資料をできるだけ多く作成する。

(4) 方言の摩滅のプロセスの解明

副次的に、他地方に移住した山形市方言話者の、文法面での消失過程を探る。具体的には、渋谷はこれまで、山形市方言の一部の文末詞の記述を、主に自身の内省をもとにして行ってきたが、文末詞のなかには、①内省によって十分に記述できるもの、②共通語の文章などを方言に訳すという作業のなかでようやく例文が作れるようになったもの、③そのような作業を行っても一定の例文しか作れないものなどがあつた。なぜこのような状況が生じたのかを探ることが、この項目の課題である。

3. 研究の方法

(1) 個々の文法項目の記述

ジェ・ヤ・ナ・ネ・ヨ・ガなど、まだ記述を行っていない文末詞を中心に、できるだけ多くの文末詞について、その記述調査を現地で行う。インフォーマントは山形市街地およびその周辺地域の高年層生え抜き3名に依頼し、滞在期間中に、それぞれ4～5回(各回2～3時間)にわたって調査を実施する。調査は、例文の適格性判断法、例文作成依頼法、対話のなかで得られた例文の採集等、複数のものを併用して行う。

(2) 多様な談話データの収集と文字化

当該方言話者2人の会話場面や、単独で昔話を語った場面など、できるだけ多様な内容の高年層による談話資料を収集する。

4. 研究成果

(1) 成果

本研究期間に、以下の成果をあげた（5項参照）。

- ① 雑誌論文4件
- ② 学会発表1件
- ③ 図書1件（共著）
- ④ 本プロジェクトの成果報告書

①は個別的な文法事象（文末詞ジェと文末詞が長音化される場合）を分析、記述した論文2件と、方言を使用した言語行動をまとめた論文1件、それに、完成された『方言文法全国地図』全6巻を、記述文法の視点からその長短を評価検討した論文1件を含む。

②は、発表時点での渋谷の当該方言に関する研究を総覧したもので、その成果を言語学界に問うたもの。

③は記述研究の成果を、角度を変えて通時的な視点から総合的に捉え直した論考である。

④は本科学研究費補助金による研究成果の報告書で、上記論考のほか、当該方言の引用・伝聞形式のテ・トについて記述した書き下ろしの論文を掲載した。

なお、渋谷の採用する文末詞を記述するための次のような枠組みは、本研究において刊行した論文や行った口頭発表を通して、広く学界で採用されるようになってきている。

1. 形式的特徴（異形態の整理）
2. 分布（おおよその意味・機能の確認）
 - 2.1 共起する文タイプの確認
 - 2.2 他の文末詞との相互承接関係
3. 意味・用法の記述
 - 3.1 基本的意味・用法
 - 3.2 文脈によって生じる語用論的効果

(2) 今後の展望

一方、以下の研究課題については、データの収集は完了したものの、本研究の間中には活字化するまでにいたらなかった。今後、継続的に発表していく。

① 文末詞の網羅的な記述

山形市方言の15前後の文末詞のうち10の文末詞については、本研究での成果を含め、一応の記述を終えているが、その他についてはまだ包括的な記述にはいたっていない。これらについては引き続き完成を目指す。

② 動詞文の文法カテゴリーの網羅的な記述

ヴォイス、アスペクト・テンス、伝達的なモダリティを担う文末詞の多くについては

本研究以前および本研究によって記述を終えているが、格や判断のモダリティなどの記述はまだ行えていない。今後記述を加えていく。

③ 日常会話のテキストデータ

談話データについては高年層生え抜きの談話を3時間ほどICレコーダによって録音している。一部はすでに文字化しているが、今後さらに文字化を進め、学界に提供する。

④ その他

研究の計画段階では、次の2つの発展的な研究も視野に入れていたが、いずれも取り組むまでには至らなかった。今後の課題である。

④-1 言語学的発展

ひとつの方言をきめ細かく記述し、また他の方言を記述するための方法を開発することは、将来の通方言的な研究の可能性を開くことになる。具体的には、文末詞の類型論や、文末詞の言語地理学的な研究などがあげられる。日本語方言のアスペクトの研究などとは異なって、いずれも未開拓の分野である。

④-2 応用的発展

ひとつの方言をきめ細かく記述することは、将来、その方言の教科書を作成するのに重要である。山形市周辺には日常的に方言と接触することの多い外国人定住者が多く、当該方言を習得するための基本的な教科書が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① Katsumi Shibuya 'Aspect of Style-shifting in Japanese.' In M. Minegishi, Y. Kawaguchi and J. Durant (eds.) *Studies in Linguistics Vol. 1. Corpus Analysis and Variation in Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins., 無, 2009, pp.339-360.
- ② 渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ジェーヨ・ズ・バと対比して一」『阪大社会言語学研究ノート』8, 無, 2008, pp.1-13.
- ③ 渋谷勝己 「文末詞の長音化における語用論的機能—山形市方言を例にして—」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院, 無, 2007, pp.381-398.
- ④ 渋谷勝己 「記述文法から見る『方言文法全国地図』」『日本語学』26-11, 無, 2007, pp.164-172.

[学会発表] (計2件)

- ① Katsumi Shibuya 'Aspects of Style-shifting in Japanese' GCOE International Conference "Corpus and Variation in Linguistic Description and Education." May 9, 2008, Tokyo University of Foreign Studies.
- ② 渋谷勝己「方言文法研究の動向と展望」日本言語学会, 2007年11月25日, 信州大学.

[図書] (計2件)

- ① 渋谷勝己『平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 山形市方言における動詞述語文の記述的研究』, 大阪大学, 2010, pp.1-66.
- ② 金水敏・乾善彦・渋谷勝己『シリーズ日本語史 4 日本語史のインタフェース』岩波書店, 2008, pp101-203.

[その他]

ホームページ等
準備中

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渋谷 勝己 (SHIBUYA Katsumi)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 90206152